様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　研究成果報告書

令和　２年　５月２９日現在

機関番号：12601
研究種目：奨励研究
研究期間：2019
課題番号：　19Ｈ00065
研究課題名：大学の教育研究資源を用いた高校世界史の教材開発

研究代表者
南澤　武蔵（MINAMISAWA, Musashi）
東京大学・教育学部附属中等教育学校　教諭

交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：540,000円

研究成果の概要：本研究は、高校世界史における高大連携の在り方を模索したものである。エジプトの西方デルタにある古代集落の調査研究（大学の教育研究資源）を高校世界史の教材として扱うため、考古学的な研究の最前線にあたる遺跡調査を実施している調査隊の協力を得て、授業に有用な資料を収集するエジプトでの踏査を実施した。その上で、大学の研究機関が行う研究活動で得られた教育研究資源を高校世界史の授業教材として用いた実践を行い、教材としての有用性を確認し、その活用の一例を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の意義は、これまでの高大連携における、大学教員による出前授業や高校生向けの講座とは異なった形での連携の可能性を提示した点にある。従来は大学教員や研究者がその一端を高校生のレベルに合わせて提示していた大学の教育研究資源に対して、本研究ではエジプトで調査を行っている調査隊の協力のもとで高校教員が可能な限りでその調査を一つの資料として扱い、取捨選択して生徒に提示をした。本研究の結果としては、大学の教育研究資源のより直接的な利用によって高校生の世界史における「主体的・対話的で深い学び」につながる教材開が可能となることが明らかとなった。

研究分野：社会科教育　世界史教育　歴史教育　エジプト学　エジプト考古学

キーワード：大学の教育研究資源　エジプト西方デルタ　高校世界史

１．研究の目的
（1）　高等学校の次期学習指導要領においては大学等の教育機関との連携促進が記されており、今後高大連携は益々求められていく。その際、大学の研究活動で得られた教育研究資源を高校教育に活用する機会も増えると考える。すでに理系分野においては、連携が進んでいるようにも思われるが、歴史教育においては高大連携を進める学会もあるものの、十分に進んでいるとは言えない。また、教育研究資源の活用は大学側から提示される形で行われているのが現状であるが、実際に授業を行う教員側が教材としやすいものであるとは限らない。そうした点をふまえ、大学の教育研究資源に対して高校側から求めていく形も必要だと考える。そこで、本研究では大学の教育研究資源を高校世界史の授業における教材として活用する方法を、高校教員の側から検討することを目的とする。

（2）　本研究は、高校世界史の「オリエント世界」と「地中海世界」の単元に関連して、エジプトの西方デルタにある古代の町の調査研究を教材として扱う。教材化においては、考古学的な研究の最前線にあたる遺跡調査を実施している調査隊（エジプト西方デルタ調査隊、代表：早稲田大学総合研究機構客員教授　長谷川奏）の協力を得て、その調査地を中核にすえる。長谷川氏が調査を行っているコーム・アル＝ディバーゥ遺跡はイドゥク湖畔に営まれた集落遺跡であり、ヘレニズム時代以降に形成されたと考えられている（長谷川 2018: 90）。アレクサンドリアが建設され、古代エジプトと地中海世界の結びつきを強める時期に形成された潟湖周辺の分布する遺跡の一つであり、高校生にオリエント世界と地中海世界との関係性を考えさえるのには適した遺跡だと考えた。そして、調査隊の協力のもと、遺跡や時代の理解に必要となる資料を収集するためにエジプトでの踏査を行い、その上で大学の研究機関が行う研究活動で得

られた教育研究資源をどのような形や構成で授業教材として生徒に提示することができるのかを検討する。実際に高校世界史Ｂの授業において教材として活用し、歴史科目における大学の教育研究資源の活用方法とその在り方を明らかにする。

２．研究成果

(1)　本研究では、エジプト西方デルタ調査隊の長谷川奏氏から事前に情報提供を得て遺跡理解に必要な踏査地を選定し、踏査および資料の収集を実施した。踏査対象地は大きく２つに分けられる。一つは、アレクサンダー大王によって建設され、プトレマイオス朝の都、ヘレニズム世界の中心として繁栄したアレクサンドリアにある遺跡（主にローマ属領時代）や出土遺物が納められた博物館である。具体的には、ローマ時代の円形競技場や大浴場などが並ぶコーム・アル＝ディッカ、主にローマ属領時代に用いられた地下墓地のコーム・アル＝シェッファーカァ、プトレマイオス朝時代にセラピス神殿があった「ポンペイの柱」である。博物館等の施設としては、グレコ・ローマン博物館は改修工事で閉館中であったため、国立民族学博物館およびアレクサンドリア図書館内の考古学博物館で資料を収集した。

もう一つのグループは、アレクサンドリアの周辺にあって地中海世界と伝統的なエジプト世界が融合していった様子を示す地域や関連する遺跡である。オシリス信仰が盛んであったタプオシリス・マグナやその近くで栄えた町プリンティネを訪れ、かつてはプトレマイオス朝の王宮があったアブキール湾や、タプオシリス・マグナと同じように信仰の中心であったカノプスの町があった場所なども確認した。また、遺跡の立地環境を理解するために、コーム・アル＝ディバーゥ遺跡と同じように砂丘上に形成されたラシード近郊の遺跡を踏査し、イドゥク湖では手投げ網漁を記録することができた。

その他にも、ローマ帝国時代からの初期キリスト教の遺跡が広がるアブ＝メナ修道院でも資料を収集し、ロゼッタ・ストーンが発見されたラシード（ロゼッタ）のジュリアン要塞も訪れて、高校世界史の授業で利用できる資料を探した。

(2)　授業実践においては収集した資料によって、研究者が当時の姿を復元するように、高校生が現在は失われている建物や都市、集落などのイメージをもつことが可能となった。例としては、教科書にも記述があるかつてアレクサンドリアにあった大灯台や図書館、ムセイオンなどのイメージを持てるような資があげられる（図 1・2)。さらに、具体的なイメージをもつことができる資料を多く集めることができたため、ストラボンの『地理誌』(飯尾都人訳『ギリシア・ローマ世界地誌』全２巻、龍溪書舎）や調査報告や研究論文を、授業内容を深める資料することにも取り組んだ。今回収集した画像資料などは、研究者であれば既に保持していると推測するが、資料を配列することや複数の資料を組み合わせて提示することで高校生自身にエジプトと地中海世界の融合についての考えを深める素材となった。

図１　書架の壁龕

図２　講義室

踏査中に、高校世界史の教科書に名前が出てくるローマの将軍アントニウスのあまり知られていない彫像の頭部を見つけて記録することができた。また、プトレマイオス朝の遺跡が広がるアブキール湾やネルソン島、古代遺跡の石材が石組みに用いられたジュリアン要塞は、古代史だけではなくナポレオンに関連した授業にも資料として活用することができる。こうした資料も大学の研究者は周辺調査の一環として記録をしていることが多いと思われ、調査で記録したものは高校世界史の授業における有用性は高く、大学の教育研究資源の高校世界史における価値の大きさを示していると指摘することができる。

授業で用いる資料としては画像だけではなく、動画も有効であった。例えば、セラピス神殿の地下の書庫と思われる空間は、暗く細長い空間であるためカメラでは記録が十分にはできなかった。数分程度の動画にしておくことで、授業時に生徒に示しやすくなった。砂丘上に形成された遺跡の様子等を示す際にも動画の方が有用であり、高校の授業においては動画として資料を収集して提示する必要性を確認することができた。

(3)　踏査で収集した資料を教材とした授業実践は、「古代エジプトと地中海世界の結びつき」を課題としたグループ発表を行う単元として設定した。単元の主な構成は、踏査で得てきた資料を基にした講義と、グループでの調査、発表・評価である。コーム・アル＝ディバーゥ遺跡を考えることを通して「古代エジプトと地中海世界の結びつき」を生徒自らが考えることを目

的とした。収集した画像資料、研究論文を含む文献資料などを生徒が利用できるようにした。その結果、生徒たちは、さまざまな資料から自分たちなりの「古代エジプトと地中海世界の結びつき」の考えを発表していた。授業後のアンケートからは、遺跡の調査研究という大学の教育研究資源に結びついた課題に取り組む難しさとともに、思考する楽しさを味わったとする意見もあった。また、教科書や資料集には出てこないエジプトの姿を求めた調査研究に触れたことで、古代エジプトのイメージが変わり、多角的・多面的にとらえるようになった生徒や、調査の今後に対する興味・関心をもつ生徒もいた。

こうした実践での成果は2つのことを示している。一つは、大学の教育研究資源が高校生の授業教材として魅力的であることが再確認されたことである。もう一つは、授業イメージをもっている高校教員の目線で資料の収集にあたることで、より高校生に有用な資料として構成することができる点である。高大連携の形には、高校側の教員が大学の教育研究資源を活用する方法が模索されていく必要性を指摘することができる。今後は、本研究の踏査で得た資料をより活用していく方法を探り続けるとともに、「高校教員の視点」での資料や高大連携の在り方について整理していく。

〈引用文献〉

① 長谷川奏、イスラーム世界における生活文化の多様性―ナイル・デルタの湖沼地帯から―、『研究東洋』、第8号、2018、86－97項

3．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

① 南澤　武蔵、エジプト西方デルタを教材とした授業づくり―高大連携の可能性を広げる模索―、東大附属論集、査読無、第63号、2019、69―79

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。